



第14回の開催記念パーティーにて(2007年11月)

「文化の砂漠地と言われる大阪でこそ、映画文化を構築したい」。大志を抱いてフランスから大阪に移住したパトリス・ポワトーさん(48)は、1994年から毎年秋に大阪で「大阪ヨーロッパ映画祭」を開催している。まさに人生をかけて映画祭を守り続け、今秋いよいよ15周年の記念の年を迎える。

ヨーロッパの多様性伝える

大阪にも大小さまざまな映画祭がある。その中でヨーロッパ映画祭は、15年間一貫してヨーロッパの“今”を伝えてきた。厳選した最新映画の日本初上映を柱に、ゲストを招いてのディスカッション、旬のテーマを掲げた特別イベントなど多彩なプログラムで、ヨーロッパ文化の多様性を発信している。

そのすべては全くのゼロからのスタートだった。今でこそ少数精鋭のスタッフがおり事務所もあるが、「間借りした小さなスペースに机を1つ置いただけ」の環境の中で準備に奔走。3年かけて第1回の開催にこぎ着けた。

“外国人が大阪で立ち上げた映画祭”ということで話題を呼び、大いに期待された。その追い風を受け、初の祭典は成功裏に終わった。達成感に浸ったのも束の間、次年に向けての準備に取りかからなければならなかった。「時間的にも資金的にも大変だったけれど、辞めたいとは言えなくなった(笑)」

大阪から映画文化を発信

すこしずつ規模を拡大しながら今では本格的な映画祭を展開している。そのため、とにかく資金が必要だ。「観客動員数的には毎回成功しているが、いつもお金が足りない。ネームバリューがなかった15年前よりも、大阪の企業に元気のない今の方が大変」と苦渋の色を浮かべる。

「大阪の文化の砂漠化は今もあまり変わっていない」ともらす。「例えば美術で言えば、素晴らしい美術館はあるけれど、気軽に立ち寄れる展示会の数や種類はまだまだ少ない。文化ライフが育っていない」

それでも大阪で続けることをあきらめない。「お城と一緒に、1つ1つ石を積み上げていくしかない。グローバル化が進む我々の社会を理解するためにも、映画を見るのが一番いい方法。大阪発信で日本の映画文化を変えたい」

尽きぬ情熱

今年のオープニング特別イベントでは、生誕100年を迎える巨匠デビッド・リーン監督と、映画音楽誕生100年を記念して作曲家モーリス・ジャール氏にスポットを当てる。両氏が手掛けた不朽の名作「アラビアのロレンス」をニュープリントでスクリーンに甦らせるほか、映画祭のキーワードとなる“多様性”を考えて選出した10作品を上映する。

さらに、モーリス・ジャール氏を招いて、ドキュメンタリーの上映とディスカッションの時間を設ける。「彼のドキュメンタリーを見て、実際にお会いし、音楽だけでなく人間としても素晴らしい人だと分かった。84歳の高齢だが、30年ぶりの来阪を快諾してくれた」

いよいよ開幕が迫った今、毎日が火を吹くような忙しさだ。大学で勤めるフランス語と映画の講師と並行しての活動だが、そのパワーは「スタッフや観客の情熱」によるものが大きいという。

「プライドの問題じゃない。美味しいものを作りたいという料理人の思いと一緒に、完璧にやりたい」。じっと前を見据えて言い放った。

(文・江中咲紀 / 表紙写真・高島悠介)

映画祭で 大阪の文化興隆

プロフィール

大阪ヨーロッパ映画祭 実行委員長

パトリス・ポワトーさん



フランスのリモージュ生まれ。14歳で自主映画を制作し、17歳でシネマクラブ設立・パリの大学で現代文学と映画、演劇美術を学ぶ。様々な国際映画祭の委員会に参加し、「シネマ・ブリュリエル協会」の実行委員長に就任。映画やテレビ番組の制作、監督、プロデューサーなどとして関わる。1998年に在日フランス大使館の依頼で初来日。1994年から大阪ヨーロッパ映画祭の実行委員長ならびにエグゼクティブ・プロデューサーを務める。

第15回大阪ヨーロッパ映画祭

特別イベント	11/21(金)リサイタルホール「伝説の巨匠~デビッド・リーンとモーリス・ジャール~」
メイン上映会	11/22(土)~24(休)リサイタルホール ヨーロッパ最新映画10本の初上映
関連イベント	特別回顧展「ヌーヴェルヴァーグから遠く離れて」~12/5(金)プラネットプラスワン 東欧・ロシア“20世紀・映画の旅” 11/15(土)~28(金)シネ・ヌーヴォ 世界のCMフェスティバル2008 in 大阪 11/28(金)大阪厚生年金会館 キングダム・フィルム特集 11/15(土)16(日)キッズプラザ大阪・クレオ大阪中央 写真展「映画界のエトワール・一期一会」 11/1(土)~9(日)梅田スカイビル空中庭園展望台

詳しくは <http://www.oeff.jp/> お問い合わせ 6882-6213 実行委員会事務局